

2つの結婚

— *The Spanish Gypsy* から *Daniel Deronda* へ

谷田 恵司

I

The Spanish Gypsy は、1868年の発表当時は新聞等で非常に賞賛され、かなりな売れ行きであったという¹⁾。しかし、そうした初期の受容は、すでにある程度名声を確立していた有名作家の作品だからという要素が大きかったようで、その後の評価は決して高くはない。それは、たとえば2008年に至るまでこの作品の校訂版が出ていなかったとか、あるいは *Oxford Reader's Companion to George Eliot* では、*Daniel Deronda* には8ページ以上使っているのに、*The Spanish Gypsy* の項目にはたった8行しか割り当てていない(“poetry of George Eliot” という別の項目中ではもう少し長く触れている)、という事実からも明らかであろう²⁾。結局のところ、Henry James が作品発表直後に書評で書いた次のような評価が、少なくとも詩作品としてみた場合には依然として説得力を失っていないと思われる。

It seemed to contain very few of the silken threads of poetry; it lay on the ground like a carpet, instead of floating in the air like a banner...

Its great fault is simply that it is not a genuine poem. It lacks the hurrying quickness, the palpitating warmth, the bursting melody of such a creation...

In this poem, we see the landscape, the people, the manners of Spain as through a glass smoked by flame of meditative vigils, just as we saw the outward aspects of Florence in *Romola*.³⁾

G. S. Haight もこの書評が「もっとも公正な評価であろう」⁴⁾と述べている。

とすると、この作品を論ずる際の視点は、作品それ自体を詩作品として独立して論じるよりも、この劇詩のエリオットの作品群中での位置づけや他作品との関連、さらにより視野を広げて歴史的、地誌学的関心や、文学作品におけるジプシーや他民族の扱いといった、作品テキスト外の状況との関連に焦点を当てたものになりがちであることは避けられない。

本稿においてもまた、そうした方向性を認識した上で、特に *Daniel Deronda* との関連を念頭において、この二つの作品に見られる「結婚式」をひとつの焦点としてこの作品を論じていく。なぜ結婚式を取り上げるのか。それはそこにこの作品の、さらにはエリオットの主要なテーマの一つである、個人と共同体の対立と融和の可能性という問題が浮き彫りにされていると思われるからである。

II

最初に、*The Spanish Gypsy* に関する4つの初歩的な疑問から出発してみたい。それは以下のようなものである。(1) 作者はなぜ15世紀末のスペインを舞台としたのか。(2) なぜジプシーをヒロインにしたのか。(3) なぜ劇詩という形式を選んだのか。そして最後に、より具体的な疑問として、(4) SilvaはFedalmaについていくためジプシーの一員となり、やがてそれを悔やんで最後にはまたキリスト教徒のスペイン人に戻ろうとする。それはなぜか。作品としての整合性の面から、そして作者の意図から、シルヴァの行動をどう理解したらよいのだろうか。

まず、最初の二点を考えてみよう。なぜ15世紀末のスペインで、なぜジプシーなのか。エリオットは、その作家活動の前期においては、自らが生まれ育ったイギリス中部の田園地帯を舞台として作品を書いた。その後、*Romola* で15世紀末のフィレンツェを取り上げるが、次の *Felix Holt* では舞台をイギリスにもどす。さらに *Middlemarch* ではイギリスの地方都市を舞台にし、最後の長編である *Daniel Deronda* では、舞台はヨーロッパとイギリスを行き来する。こうした、作品の舞台の時間と場所の拡大、複雑化は、基本的には作家が自らのテーマに

ふさわしい時間と場所をもとめた結果と思われる。ではなぜ15世紀末のスペインなのか。Leslie Stephenは以下のように述べてその舞台設定に異議を唱える。

Why did George Eliot suppose that the only fitting historical embodiment was at "a particular period of Spanish history"? This seems to involve a singular leap in the logic. It is especially noticeable in a writer who has insisted that the highest motives may be found under commonplace outsides; that country parsons and farmers may have the "root of the matter" in them; and that even the passions which inspired the Greek tragedies may be shown at work in the breast of an eight years' old girl. "Heredity" has been annexed of late years by "realistic" novelists; but, in any case, the struggle between loyalty to our race or family instincts, and the wider forces of evolution, might be illustrated from transactions less obscure than the struggle in the Spain of the fifteenth century. [...] Why place the heroine among conditions so hard to imagine? ⁵⁾

この疑問は、まったく基本的なことであるが、現在でも十分通用する指摘であると思われる。たしかに、あれほど苦労して書いた *Romola* ですら、結局小説としては決して出来がよいわけではなく、時代や場所を19世紀イギリスから離れた場所に設定し、さらにそこにさまざまな歴史的事実を詳細に織り込んだことが全体としてはかえってマイナスになり、逆に読者と作品世界との距離を広げている面があることは否定できないだろう。この *The Spanish Gypsy* 同様、*Romola* も企画としては興味深い冒険的試みと見なせるであろうが、小説としてはあまりに舞台装置にこだわすぎたという感が否めない。では、なぜそれほどまで舞台装置にこだわったのか。ひとつの可能性としては、家庭や村落、地方都市などの共同体と、そこに生きる個人との関係を小説という形式で探るためには、共同体の利害が個人の利害と明白に対立する必要がある。そこでエリオットは民族という、家庭や村落、地方都市よりもさらに大きな運命共同体を、個人と対立する要素として扱うことにしたのではないだろうか。

それでは、民族という問題を取り上げるにしても、なぜジプシーだったのか。Deborah Epstein Nordは、19世紀の作家が「他者」を取り扱おうとする場合に、

大英帝国の植民地の住人、ユダヤ人、そしてジプシーの三つの可能性があった、と論じている。それによれば、大英帝国の植民地の住人は、イギリス本土から離れている。ユダヤ人は、イギリス社会の内部で一定の役割を果たしつつ機能している。これに対して、ジプシーは「国内にいて目に付くが、社会的には周辺に位置する」存在である。こうして19世紀の女性作家たちは、自分たちの抑圧された女性性が社会的逸脱とみなされ、さらにそれがあたかも「民族的差異」であるかのように扱われている、と感じた。そうした差異を人物像として具体的に表現する素材として彼女たちはジプシーのイメージを用いた、とノードは述べている⁶⁾。

そこにはジプシーという「民族」の特殊性がある。彼らは21世紀になってすら、そもそも一民族として扱うべきかどうかの合意すら形成されていないまま「ジプシーと呼ばれる人々」と呼称するしかない。「放浪の民。魅惑的な音楽と華麗な踊り。男たちをとりこにする自由奔放な美女。掌を読んで、あるいはカードを操ってやる神秘的な占い。戦火と迫害に追われる貧しい難民。乞食や泥棒をもっぱらとする集団」⁷⁾という強烈なイメージのみが広がり、歴史や実態はほとんど知られていない。「民族」(あるいは集団)としての定義どころか適切な名称すら定まっていない、「近代資本主義の形成過程で、国民として統合されることなく、排除・排斥されることになった人間集団」⁸⁾であるとされる。そこにはたとえばGeorge Borrowが*The Zingali: An Account of the Gypsies of Spain* (1841)などの一連の著作で伝えたジプシー像がいまだに色濃く反映している。彼らのそうした非日常的・周辺的・被差別的集団であるという特殊性を、エリオットは自分が取り上げようとしたテーマにふさわしいと判断したのであろう。Bernard Semmelはこのところを、“Gypsies fit the bill rather well.”⁹⁾とまで端的に表現している。

次に、なぜ劇詩という形式を選んだのかを考えたい。なぜエリオットはレズリー・スティーブンが上記の引用で「それほど荒唐無稽な状況」と言ったような、リアリズムではありえない設定を用いたのだろうか。エリオットは、主要登場人物にジプシーを使うという題材からして、時間や場所を当時のイギリス以外に設定しようとした。しかし彼女は*Romola*執筆の際の苦勞で、リア

リズム形式の小説で時間や場所を大きく乗り越えることの困難を身にしみて知っていた。そこでここではそうした困難を回避するために、劇詩という形式をとったのではないだろうか。言語的困難、つまり詩として書くことの困難はあるにしろ、内容的には劇詩という形式であれば、克明な描写や精密な分析などは小説の場合ほど重要ではない。その点を考えて、エリオットはこの形式を選んだのではないだろうか。

また、E. B. Browningの*Aurora Leigh* (1857)との関連もよく指摘されることである。エリオットはこの作品を少なくとも3回は読み、1857年のある手紙でこう語っている。“We are reading ‘Aurora Leigh’ for the third time with more enjoyment than ever. I know no book that gives me a deeper sense of communion with a larger as well as beautiful mind.”¹⁰⁾ こうして、劇詩という形式の選択にはこの作品の影響が大きいと推測される。しかしそこで扱う問題としては、ブラウニングが主人公の女性の芸術家としての自立心と男性との愛情との相克を焦点のひとつとしたのに対して、エリオットはその自立心を民族的帰属という問題と対置させている。

III

次にフェダルマの場合の選択がどう行われたかを確認してみたい。第一に、フェダルマがとったジプシーとして生きるという選択は、自発的選択というよりは強制的に外部から、具体的には父から与えられた方向である。彼女はその重荷に苦しみ、自分が果たして父親のように仲間を率いていけるのかどうか悩み続ける。しかし自分がジプシーであること自体は、父から知らされて、“Of a race / More outcast and despised than Moor or Jew?”¹¹⁾と驚きながらも、それを完全に事実として受け入れる。シルヴァへの置手紙でも“my father came. / I am the daughter of the Gypsy chief” (I, 3183-84)と書き、父がそう言っているという伝聞ではなく、事実の報告という文面になっている。

だが、*Daniel Deronda*の場合もそうであるが、たとえ生物学的にそうした血統であっても、キリスト教徒であるスペイン人やイギリス紳士として育てられた人

間が、はたして自らが幼年期から育った家庭や教育といった環境の影響をそうやすやすと乗り越え、消し去ることができるだろうか。フェダルマが自分がジプシーであるという新しいアイデンティティを容易に受け入れることは、この作品のいわば所与の状況として置かれている。ある状況を、あたかも幕が上がったら舞台上にすでに存在しているものであるかのように受け入れることが、この作品の読者には求められている。そうした虚構空間創作上の操作が比較的容易に行えることも、ここで劇詩という形式が用いられた理由だと思われる。

しかし、フェダルマは最初に父から自分がジプシーであると聞かされたとき、それを受け入れながらも、まずシルヴァと結婚してから、と思う。“Never forsake that chief half of my soul / Where lies my love” (I, 2957-58) 彼女はここではシルヴァを捨てられない。そして彼女は悩む。“Fate has carried me” (III, 453) と言っておきながらも、すぐにまた “My soul is clogged with self” (III, 472) と言う。つまり自分というもので詰まって、滞っているという。これは重要な発言である。なぜ自我がいけないのか。なぜ自我は義務と対立しなくてはならないのか。なぜ自分を犠牲にしなくてはならないのか。その点で対照的な人物像としてシルヴァを次に検討してみたい。

シルヴァは、スペインの貴族として、その家系に対しても責任があり、また兵を率いて戦う使命がある。しかし彼は単に愛する女性がジプシーの後継者となったというだけの理由で、自らのスペイン人でありキリスト教徒であるという属性を捨て、誓いを立ててジプシーの仲間になる。まるで衣服を脱ぎ着するように、簡単に民族の帰属を変える。それは、*The Mill on the Floss* で幼い Maggie がジプシーの仲間になろうと家出するのと同様である。

シルヴァとマギーは民族への帰属を変えることの意味を理解していない。しかしマギーは周囲から「ジプシーのようだ」¹²⁾と言われ、そして彼女自身、自分が周りの人々とは何か違うという自覚があった。その自覚が彼女の家出を、そして社会の周辺に生きるものたちへの憧れを促した。それに対して、スペイン人として生きてきた時のシルヴァにはそうした他者性の自覚はない。あくまでスペイン社会の重要な構成員として生き、周囲も自分もそれを疑っていない。

K. M. Newton によれば、シルヴァは自分の外部の規律を認めないバイロンの

なエゴイストである。フェダルマが自分の魂に充満して困っていると言う「自我」を、シルヴァはそのまま自分の行動の基準としているのだ。しかし、「自我」に従った彼は、結局自分の家族や友人たちが殺されるのを見ることになる。なぜなら、人はみな、それぞれの伝統を持つ社会組織の中で生きているのであり、シルヴァの行動は “an assertion that he can choose his own identity and values by an act of will”¹³⁾ であり、自分の過去を切り捨てることになるのだから、とニュートンは考える。また、シルヴァは “Love comes to cancel all ancestral hate, / Subdues all heritage, proves that in mankind / Union is deeper than division.” (III, 922-24) と言う。これは Zarca の抱く民族の歴史への執着の対極にある考えである。しかしザルカは理想の実現を見ることなく死んでいく。そもそも彼の計画はあまりに理想主義的で実現が危ぶまれるし、仮にそれが実現されたとしても本当にジプシーという人々の幸福につながったであろうかは疑問が残る。

シルヴァは、最終的にはキリスト教徒に戻ろうとして、法王の許しを請いにローマにまで行くことになる。これは切り捨てたはずの過去への回帰であり、自我にしたがって生きても、結局は個人では乗り越えられない壁に突き当たるという認識を示すものだろう。こうして、自分の所属集団の歴史にどう対応するかという点から、ザルカ、フェダルマ、そしてシルヴァ、それぞれの生き方が多角的に示されていると言えよう。

IV

作品の最後にフェダルマとシルヴァの「結婚式」の情景が、以下のようにごく簡潔に描かれている。

FEDALMA

We must walk

Apart unto the end. Our marriage rite

Is our resolve that we will each be true

To high allegiance, higher than our love.

Our dear young love, - its breath was happiness!
 But it had grown upon a larger life
 Which tore its roots asunder. We rebelled -
 The larger life subdued us. Yet we are wed;
 For we shall carry each the pressure deep
 Of the other's soul. (V, 335-344)

ここでフェダルマは、二人がそれぞれ大きな使命のために力を注ぐと誓うことこそ私たちの結婚式だ、という言い方をしている。その点を天野みゆき氏は“she is able to change her sorrow into hope, and contextualize her personal experience as part of the flow of history.”¹⁴⁾と見る。たしかに、個人の経験をより大きな歴史の流れの中で捉えようとする視点は、エリオットの特徴の一つである。ここではさらに具体的に、なぜエリオットは最後に二人を「結婚」させたのかを考えてみたい。より高い次元のものへの忠誠を誓うことが自分たちの結婚の儀式であるとするのは、自分たちの愛情よりもより高い次元を承認していることである。そうした、個人を犠牲にして全体に奉仕する義務を優先する選択は、具体的人間感情に基づいたものでない、非常に抽象的な理念的選択である。フェダルマとシルヴァの結婚には具体的実体はない。二人はこの後、別々の道を歩み、二度と出会うことはないだろう。結局これは、エリオットによる公的義務と個人的感情との象徴的融和の試みである。

こうした実体のない形でしか融和が示せないということが、この後の *Daniel Deronda* での Daniel と Mirah の結婚というプロットをすでに暗示している。この結婚では、マイラは最後まで受身でありダニエルと対等に心を通じ合わせてはいない。ダニエルはグェンドリンとの精神的関係の方がマイラとの関係よりもはるかに深く、親密である。ダニエルがグェンドリンに、マイラとの結婚を告げた直後の会話を見てみよう。

'We shall not be quite parted,' he said. 'I will write to you always, when I can, and you will answer?'

He waited till she said in a whisper, 'I will try.'

'I shall be more with you than I used to be,' Deronda said with gentle urgency, releasing her hands and rising from his kneeling posture. 'If we had been much together before, we should have felt our differences more, and seemed to get farther apart. Now we can perhaps never see each other again. But our minds may get nearer.'¹⁵⁾

The Spanish Gypsy での「結婚式」の場面との類似は明らかである。物理的な別離を必然と認めながらも、精神的なつながりの継続が確認されている。しかし、ここでは *The Spanish Gypsy* とは男女が逆であり、しかもこれは結婚式ではなく単なる別離である。

なぜダニエルがグェンドリンと結婚する形で物語が終わらないのか。それはユダヤ人問題のプロットにおいて、ダニエルはマイラと結婚することを予定されていたからである。作品の結末でダニエルはマイラを妻とし、シオニズムを生涯の仕事と定めて東方へ旅立つ。彼はいわば公私共にユダヤ人となる。たとえば *Middlemarch* の Lydgate の場合は、職業生活と個人的家庭生活を分離し、自分が理想とする職業生活をおくることができると思っていた彼が、結局は妻 Rosamond の虚栄心に耐えかね、また、銀行家 Bulstrode と自分自身の関係の不明瞭さを解決できず、二つは不可分であるという単純な真理にいやおうなしに気づかされる。それに対して、ダニエルの場合はあまりにも個人的生活と社会的存在とが一致してしまい、現実味が薄いように見える。マイラとの結婚も、愛情のためというよりも、単に個人生活と社会生活の一致を目指すための結婚に思える。

ダニエルは自らのアイデンティティが不確かで、自分は私生児かと疑ってさえたほどだったせいもあり、いとも簡単に自分がユダヤ人であることを受け入れた。“The discovery was far from painful to me.”¹⁶⁾と彼は言う。*The Spanish Gypsy* では、父が娘にその素性を明かしたが、*Daniel Deronda* ではそれは母から息子に伝えられる。そしてフェダルマがジプシーのリーダーとしての重荷を負わされるのに対して、ダニエルは新しいアイデンティティに自らの生きる道を主体的に見出していく。こうした点において、この2作品は互いに共通項と対照的な面を持つ。しかし、*Daniel Deronda* で欠けているのは異民族に対する客

観性であると思われる。

エリオットは *Daniel Deronda* では、イギリス社会の内部に生きる異民族としてのユダヤ人を扱い、民族的主体性や自律という問題を追及した。しかし、そこでこの作家はあまりにユダヤ人に寄り添いすぎているように思われる。その結果として、こうした点においては客体化・相対化が十分に行われていない。他者としてユダヤ人の中に入り込んだはずのダニエルが結局内部の人間であることが明らかになり、対立が生物学的レベルで解消されてしまい、歴史的・社会的レベルでの解消になっていない。歴史的民族的要請への応答がきわめて容易に対応できる形でしか提起されていず、個人的レベルでの感情と集団的レベルでの義務感との間での選択の困難が提示されていない。

ここで比較しておきたいのは、*The Spanish Gypsy* におけるシルヴァによる他者性の自覚である。シルヴァはジプシーになったとき、倫理体系がまったく違う集団に所属し、彼らの中で他者となる。彼はジプシーの仲間たちから“false Zincalo” (IV, 281) と呼ばれ、いわば根無し草のような存在となり、“he was powerless now” (IV, 366) となる。こうした他者性の自覚は、大英帝国が植民地を保有する帝国であるが故の問題点として捉えることも出来よう。ジプシーたちの中でシルヴァの存在のあり方は、異分子が別の集団の内部に入り込む際の困難を示すものである。そしてこの場合は、ヨーロッパ人のキリスト教徒社会の内部に外部の人間が侵入するのではなく、逆にヨーロッパ人のキリスト教徒（つまり当時の一般的読者に近い側の人間）が他者として異文化集団に入る際の問題として示すものとなっている。こうして、ここでは外部と内部の問題、民族や帰属という問題の客体化、相対化が行われているとみなすことが出来よう。これは *Daniel Deronda* では失われている視点である。

V

The Spanish Gypsy を、*Daniel Deronda* との関連を念頭におきつつ、特に両作品の「結婚式」をひとつの焦点として論じてきた。そこでは個人と共同体との関係という一つの命題が、二つの形式で二つの状況において、個人的愛情と公的

義務、現在の幸福追求と歴史への誠実さなどの多様なパリエーションとなって考察されている。*The Spanish Gypsy* という劇詩よりも、*Daniel Deronda* という長編小説の方が、全体としてはより多くの可能性を秘め、さまざまな角度からの検討に値することは到底否定できないが、2作品それぞれの形式や状況設定が持つ可能性や限界とともに、*The Spanish Gypsy* にあって、*Daniel Deronda* で失われたものもあると言えよう。

注

本稿は2007年11月24日に中央大学で行われた日本ジョージ・エリオット協会第11回大会のシンポジウム「『スペインのジプシー』を読む」における口頭発表を原型としたものである。

- 1) Haight, *George Eliot: A Biography*, 404-406.
- 2) Rignall, “Daniel Deronda”, “The Spanish Gypsy”, “poetry of George Eliot”.
- 3) James, 476-484.
- 4) Haight, *George Eliot: A Biography*, 405.
- 5) Stephen, 162-163.
- 6) Nord. (これはインターネット上で発表されている論文からの引用のため、引用ページ数は明記できないことをお断りしておく。)
- 7) 水谷 11.
- 8) 水谷 239-240.
- 9) Semmel, 108.
- 10) Haight, ed., *The George Eliot Letters*, vol. II, 342.
- 11) *The Spanish Gypsy*, Book I, ll. 2740-41. 以下本書からの引用は、本文中に巻数と行数を括弧内に記す。
- 12) *The Mill on the Floss*, 168.
- 13) Newton, 391.
- 14) Amano, 68.

- 15) *Daniel Deronda*, 878.
 16) *Daniel Deronda*, 874.

参考文献

- Eliot, George. *Daniel Deronda*. Harmondsworth: Penguin, 1967.
 ——. *The Mill on the Floss*. Harmondsworth: Penguin, 1979.
 ——. Antonie Gerard van den Broek, ed. *The Spanish Gypsy*. London: Pickering & Chatto, 2008.
- Amano, Miyuki. "The Widening Vision and Undying Hope in The Spanish Gypsy". *The George Eliot Review*, No. 36 (2005) 63-72.
- Haight, Gordon S. *George Eliot: A Biography*. 1968; reprint, Harmondsworth: Penguin Books, 1985.
- , ed. *The George Eliot Letters*, 9 vols. New Haven: Yale University Press, 1954-78.
- James, Henry. "The Spanish Gypsy", *The North American Review*, vol. 107, Issue 221 (1868); reprint, Stuart Hutchinson, ed. *George Eliot: Critical Assessment*, vol. I. East Sussex: Helm Information, 1996.
- Newton, K. M. "Byronic Egoism and George Eliot's *The Spanish Gypsy*". *Neophilologus*, vol. 57, no. 4 (1973) 388-400.
- Nord, Deborah Epstein. "'Marks of Race': Gypsy Figures and Eccentric Femininity in Nineteenth-Century Women's Writing". *Victorian Studies*, Vol. 41, No. 2 (1998).
 <<http://www.iupress.indiana.edu/journals/victorian/vic41-2.html>> アクセス 2008 年 7 月 12 日
- Rignall, John, ed. *Oxford Reader's Companion to George Eliot*. Oxford: Oxford U. P., 2000.
- Semmel, Bernard. *George Eliot and the Politics of National Inheritance*. Oxford: Oxford U. P., 1994.
- Stephen, Leslie. *George Eliot* (English Men of Letters). London: Macmillan, 1902.
- 水谷 駿 『ジプシー——歴史・社会・文化』 平凡社 2006 年。

The Two Marriages: from *The Spanish Gypsy* to *Daniel Deronda*

Keiji Yata

If we compare the "marriage rite" at the end of *The Spanish Gypsy* and the marriage of Daniel and Mirah in *Daniel Deronda*, we see two different ways in which George Eliot deals with the conflict between personal affection and public obligation, and also how the later novel is different from the earlier dramatic poem in certain aspects.

The Spanish Gypsy poses a few initial questions to the reader of George Eliot's novels: Why did the author choose Spain in the 15th century as her setting, and a Gypsy as her main character? Why did she use dramatic poetry instead of the novel form? And more specifically, what does Don Silva's course of action signify, when he turns himself into a Gypsy to be with Fedalma, and later regrets his decision?

The choice of the setting, which was criticized as "so hard to imagine" by Leslie Stephen, is fundamentally based on her artistic intention of setting the loyalty to one's race against pursuit of personal happiness. As Semmel says, "Gypsies fit the bill rather well" for George Eliot.

If we compare the two main characters in *The Spanish Gypsy*, Fedalma accepts readily her father's revelation that she is a Gypsy, though she was brought up as a Spanish Christian. But she is diffident about her suitability as a leader of the tribe.

Silva, on the other hand, tries to be with his lover by turning himself into a Gypsy, thus alienating himself from his fellow Spaniards while at the same time not being accepted as a proper Gypsy. He tries to be a Christian again after he witnesses the killing of the Spaniards by the Gypsy tribe. Silva thus embodies a selfish disregard of one's hereditary duty, as opposed to Fedalma's sad acceptance of her filial and racial obligations.

At the end of *The Spanish Gypsy* is the "marriage rite" of Silva and Fedalma. Though this rite is just a verbal promise between themselves and not a public commitment before witnesses, their oath of loyalty to something higher than their love is, in the author's part, an attempt to symbolically combine public duty and the personal pursuit of happiness. This rite, not intended to result in an ordinary marriage, hints at the future

well-arranged solution in the form of a marriage between Daniel and Mirah in *Daniel Deronda*.

Mirah is a passive character throughout the novel and she is weaker than Daniel both intellectually and psychologically, while on the other hand Gwendolen could be a far better partner for Daniel, as she possesses her own independent mind. It is only for the sake of the Jewish side of the plot that Daniel marries Mirah. Daniel encounters a Jewish community first as an outsider. But as he discovers himself a Jew later, the conflict of race and the individual is compromised and is dissolved biologically, rather than socio-historically, in the course of the novel. Daniel loses his otherness when he finds he is a Jew, lightly crosses the border of race and religion, and thus is successfully absorbed into their community.

Silva on the other hand cannot resolve the conflict, and regretting his decision bitterly feels a strong sense of being an outsider when he joins the Gypsy tribe. This shows the rare figure of a Christian European character entering a Gypsy community and then feeling isolated and discriminated against, after trying to be one of them. This rejection of the outsider by a community seen in the dramatic poem is ultimately absent from the later novel.